

「最近になってやっと見えてきたもの」

神戸大学大学院農学研究科  
若手灌漑技術者フォーラム代表  
長野宇規

若手灌漑技術者フォーラムの代表をこれまで 2 年務めさせていただいた。その間たいしたことはできなかったのだが、最近自分の研究環境と ICID-YPF を重ねて考えることが多くなってきたので、そのことについて述べさせていただきたい。

若手灌漑技術者フォーラムは ICID に設置された作業部会 “Working Group on Young Irrigation Professionals Forum” に対応するよう日本 ICID 協会の下に設けられたもので、今年で設立から 8 年になる。当初の会員は ICID 協会関係者の声かけで大学や農林水産省関係研究所から若手研究者が集まった。私はその頃、アフリカでの仕事を終えてトルコ・中国での研究を開始したところであり、灌漑技術の国際的動向について情報を得たいと思い、会員になった。設立からしばらくは農業農村工学会の全国大会の開催時に定例会が開催されるのみであった。ICID 本部の YPF が起案した Agenda に対して、日本の YPF としての回答を協議することが主であったが、代表以外は ICID に実際に参加していなかったため、誰もが ICID の全体像を掴んでいなかった。

ICID 本部での議論はさておき、日本ではせっかく得た若手の横のつながりを大事にしようと、当時の代表であった田頭さんの熱意により 2006 年から「若手かんがい技術者による海外事業・研究に関する事例報告会」が開催されるようになった。そこでは会員だけでなく、海外の現場で問題に取り組む、機構、ゼネコン、コンサルタントなどの職員の方に参加・報告をいただき、海外の現場にまつわる苦労や工夫について意見交換を行ってきた。第 1 回は特別にテーマを設けなかったが、2007 年の第 2 回目では「よりよい海外事業のためのカウンターパートのとの関係のあり方」、昨年末に行なわれた第 3 回目には「若手かんがい技術者の交流親交と日本の灌漑排水に関する知識レベルの向上」をテーマとして報告会を継続している。回が進むにつれ、参加者同士気心が知れて忌憚のない意見交換ができるようになっており、技術者のフォーラムとして少し機能するようになった感がある。

自分自身は若手フォーラムの代表になった 2007 年に、初めて ICID の本大会に参加させていただいた。Agenda 作りでイニシャチブを取る人々の政治的手腕を見て、流れはできるものではなく、自分たちの都合に合わせて作るものだと学習した。日本で出来つつある緩やかな連携は心地がよいのだが、もう少し積極的にフォーラムが機能し、利用される機運が高まってよいと思うようになった。しかし構想はいろいろ湧くものの、実質的に形になったのは上記に述べた報告会だけである。簡単に言えば緩やかに連携する以上に自分に利するものが見えなかったためである。

最近になって少し変化が訪れた。世界の灌漑農業の多様性をしっかり俯瞰したいと思う

ようになってきたのである。前の職場である総合地球環境学研究所で気候学、経済学、作物学、生態学など、異分野の研究者と共同研究をした結果、自分の専門分野の特異性がよく見えるようになってきたためである。

現在グローバル問題の代表として自由経済と地球温暖化問題があり、その双方が地域社会に規範的行動を突きつけている。どちらの問題も、根本的には単一の合理性に基づいた議論で、地域性に対する配慮は政治的解決に委ねられている点が問題を難しくしている。

自由経済と地球温暖化問題は一段階地域に近いレベルにおいて水問題を我々に投げかける。従来地域的資源であった水の経済性が論じられるようになり、一方で地球スケールのモデリングによって地域ごとの水の動きが整理されつつある。地球スケールのモデリングに目を向けると、データ共有のフレームワークがしっかりしている。信頼性の高いデータセットを作ることを専門とする人々がおり、頻繁な更新が行なわれていることが、モデルの革新的進歩の背景にある。

我々の立脚するところの農業における水利用は、地域的な人間－自然の相互作用の産物であり、経済社会的、政治的にも複雑な様相を持っている。農業セクターの水利用の低効率を批判する動きに対しても、地球スケールのモデリングに対しても、「否、そんなに農業水利用は単純ではない」という想いが頭をもたげる。

グローバル・モデリングを行なう人々は、少々の不確実性は当然のこととして、仮説検証型でまずモデリングを進める。ここが違うと文句を述べれば、それを糧にしてモデルはどんどん進化する。その辺のたくましさに感心する。一方で我々の分野は現状の把握に縛られすぎているとも感じる。データの取得にも大変な労力を割いているので簡単にそれを人に渡したくない。結果として灌漑排水の分野では情報は分断され、データは死蔵されている。気がつくグローバルな解析に資するような横断的な情報構築ができていないので、いくら多様性を説いてみても、形のないものは説得力に乏しい。

私は現場大好き人間である。しかし、灌漑農地の水利用に対しての一元的な取扱いに異議を呈するために、逆にグローバルな視点から情報構築をして地域の多様性を発信せねばという気持ちに今はなっている。一地域を知るのに五年かけていた自分にそんなことができるのだろうかと自問する。少し抽象的にならざるを得ないだろう。しかし世界各地に出かけている仲間が若手フォーラムにいる。「人を迎れば情報を集めることができそうだ」、「雑誌に総説を書いているような大御所に ICID 会議で直接話をしてみたらいいのではないか」。最近そんな風に考えるようになった。

今自分の中では「人の集まり」である ICID を積極的に利用する動機がやっと生まれつつある。これはある意味で「若手からの卒業」とも言えるかも知れない。若手かんがい技術者フォーラムを通してこのように考える機会をいただいたことを、お世話になった方々に深く感謝したい。仰々しいことを書いてしまったが、しばらくは個人で人を迎る作業を慎重に進めたいと思っている。